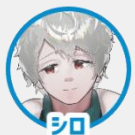


目を覚ます。

汚れた自分の部屋を見渡すと、そこにはシロが立っていた。

シロはまるで何事もなかったかのように、私に微笑みかけた。



「おはよう。よく眠れたかな」

私はかけていた布団を脇に避けると、シロに返事した。



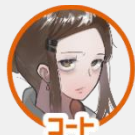
「お陰様でな。それはぐっすりだったよ」

コートは冷蔵庫を開けると、冷えた缶ビールを手を取った。

視界の端で表情が曇るシロを捉えながらプルタブを片手で開ける。

だぶだぶだぶ。

黄金色とも称される液体をシンクに流し捨てながら、コートはシロを顧みた。



「なんだよ」



「あ、いや、なんか思ったよりすぐ行動に移したからさ……」

困惑するシロに、コートは鼻を鳴らした。



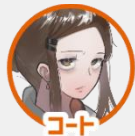
「はん、またシロを無駄に心配させて変なことをされても困るしな」

くしゃり。

コートは缶を潰すと、カーテンを開けて錆びたアルミ枠の窓を開けた。

風が部屋の中へと吹きこんで、よどんだ空気を攫って部屋の外へと連れていく。

空気と共に心が洗われていくような感覚を感じながら、コートは目を瞑った。



「生きる、か」

それは何気なく、口から洩れた呟きであった。

ただ、言葉が産んだ緩やかな決意がじんわりと、自分の中へと漲った。

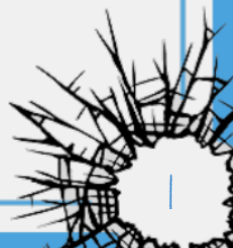
そうして目を開けると、夜空には暗闇が一面に広がっていた。

そうか。今は夜だったのか。

生活習慣の乱れを感じながら窓の縁に寄りかかり、夜の星へと想いを馳せる。

宇宙にはたくさんの星がある。

夜空に光るきらめきのどれかに、フードはきっといるのだろう。



ただ、あの日にお祭^ひり会場^{まつ}で見た星^{かいじょう}とは違って、都会^みから見^{ほし}る星^{ちが}は全然^と光^{かい}っていなかった。
そんな星^{ほし}にコートは口角^{こうかく}を少し上げると、安堵^{あんど}した。
私^{わたし}からも星^{ほし}の姿^{すがた}がよく見えないのであれば、星^{ほし}からも私^{わたし}のことはよく見えないだろう。

鼻^{はな}の頭^{あたま}が痛^{いた}くなる。

目頭^{めがしら}が熱^{あつ}くなる。

頬^ほを涙^{なみだ}が流^{なが}れていく。

私^{わたし}はすすり泣^なきしながら、上^{うへ}を向^むき、夜空^{よぞら}に向^むかって中指^{なかゆび}を立てた。

それは自分^{じぶん}を置いていったフド^おへの怒^{いか}りでもあり、
彼女^{かのじょ}をいたずらに虐^{いじ}めたこの世界^{せかい}への怒^{いか}りでもあり、
彼女^{かのじょ}の救^{すく}いになれなかった自分^{じぶん}自身^{じしん}への怒^{いか}りでもあり、
自分^{じぶん}だけ先^{さき}へと進^{すす}む覚悟^{かくご}でもあった。

くたばれよ。

それだけ^いを言^{あみど}ってコートは網戸^とを閉^へじると、部屋^やの掃^{そう}除^じに戻^{もと}ることにした。



コート

「お前^{まえ}も手^て伝^でえよ」



シロ

「出^で来るならやるけどね……」

そんなくだらないやり取り^とをしながら、片付^{かたづ}けを進^{すす}める。
気付^{きづ}けばシロはそんなコート^{なが}を眺^{なが}めながら壁^{かべ}にもたれかかっていた。
彼^{かれ}の口^{くち}からは歌^{うた}が漏^もれている。
何^{なに}の歌^{うた}を歌^{うた}っているんだろうか。
そう思^{おも}ったコート^{しんちゅう}の心^{こころ}中^{なかに}を察^{さつ}してか、



シロ

「キミが一人^{ひとり}でも、寂^{さみ}しくないように作^{つく}った歌^{うた}さ」

そうい^なうとシロは立^あち上^{あみど}がり、網戸^{ちか}のほうへと近^{ちか}づいた。



シロ

「別^{べつ}に、たいした歌^{かし}詞^しがあるわけでもないんだけどさ」

キミ^{おも}を想^{たい}って、大^か切^{せつ}に書^かいたんだ。

そうい^はうとシロは恥^はずかしがりながらも、さっきよりも大^{おお}きい声^{こゑ}で歌^{うた}を口^{くち}ずさみだした。

シロの歌^{うた}声^{こゑ}が夜^{よる}に溶^とけていく。

想^{おも}いや覚^{かく}悟^ごを混^まぜた一日^{いちにち}の終^おわりに、ゆっく^とりと溶^とけていくのであった。

